3章

【問題】（演習）

出典…伊藤徹『柳宗悦　手としての人間』／東京大学・04年

文章略解

現在、環境問題においても日常生活においても、個の概念は解体しつつある。個は集団の中で相互に絡みあって生成消滅する情報の交差点として考えられた虚構であって、個に実体はない。しかし、解体した個が溶解してゆく先にある自然の生態系の概念も人間の集団性も、もとより情報の網の目として相互に依存し合い絶えず組み替えられ作られていく恣意的な虚構であって、実体ではないということがさらに重要である。

解答

(一) 環境問題に関する行動の妥当性の判断基準を、個人や人類の利益でなく、地球の生態系の未来にわたる維持におくこと。

(二) 個性志向と見える様々な欲望は、個人の外部にある情報の総体から生成する変異体を受容したもので、すべて同根だから。

(三) 情報流通の現況に注目すると、個という概念は集団内の情報の結節点として仮構されたもので実体はないことになるから。

(四) 社会的合意は、価値観の多様性のせいで内実が不十分でも、合意という形式が整うだけで効力を持つということ。

(五) 個の概念が無効化した現代、環境問題における倫理基盤の構築のため、共同体としての生態系に価値が認められつつある。しかし

この価値観も、非実体的関係を実体と捉える人間が恣意的に想像した虚構であり、人間中心主義を脱却できてはいないということ。

〔117字〕

(六) a＝侵害　b＝匿名　c＝抗争　d＝源泉（原泉）　e＝促進

【問題】（演習）

出典…『続古事談』　／　東京大学・07年

現代語訳

堀河院は、末の世の才智に優れた帝である。中でも、統治の上での小事を、特に（念入りに）ご注意あそばされていた。蔵人の奏上した上申書（の類）をすべて（お手許に）お取り寄せになって、夜のおいでに〔＝夜を徹して〕、（それらの）文書を丁寧に御覧になって、所々に挿み紙〔＝付箋〕を添えて、「このことを尋問しなさい」「このこと（について）はもう一度問うように」などと、御みずから書き付けて、翌日、蔵人の参上したのにお与えになった。（帝が）一通り丁寧に（上申書の内容を）お聞きになることでさえ滅多にないことなのに、重ねて御覧になって、それほど〔＝それぞれの内容についてまで〕のお達しがあったということは、本当にもったいないことである。すべて、臣下の者が朝務を務める様子などをも、お気に掛けて見定めなさっていたのであろうか、（大晦日の）追儺（の行事）への出仕について支障（があるということ）を申し上げていた〔＝病という口実で出仕しなかった〕公卿が、（翌日の）元日の小朝拝に参上したのを、全員（各自の屋敷へ）追い入れて〔＝内裏から追い出して〕おしまいになった。（堀河院はそれについて）「昨夜まで病気であったようなものが、どうして一夜のうちに快癒できるだろうか。（昨夜の『支障がある』という連絡は、出仕しないための口実で、事実を）偽ったものである」と仰せになった。白河院はこの事件をお聞きになって、「たとえ聞いたとしても聞くまい〔＝私はこの件について聞かなかったことにしよう〕」と仰せになった。（堀河院の対応は）あまりのこと〔＝行きすぎなほど杓子定規で人情を解さない〕とお思いになったのだろうか。

堀河院が帝位に就いておいでのとき、坊門左大弁の（藤原）為隆は、蔵人でもあって〔＝蔵人を兼任していて〕、伊勢神宮の要望を（堀河院に）申し入れたところ、上様〔＝堀河院〕は笛をお吹きになっていて、（為隆への）お返事もなかったので、為隆は（堀河院の前から退出して）白河院（の御所）に参上し、「上様は気の病がおこらせあそばしました。（もうすぐそのための）祈祷が始まるに違いありません」と申し上げた。（白河）院は仰天なさって、（女官の）内侍にお問い合わせになると、（内侍は）「そのようなことは、まったくございません」と（お答え）申し上げた。（白河院が）不思議に思って為隆に（事情を）お尋ねになると、（為隆が）「そのことでご

ざいます。ある日、伊勢神宮の要望を（堀河院に）奏聞しましたところ、（堀河院は）お笛をお吹きになって（ばかりで）お答えがありませんでした。これは気の病の類でないなら、あるはずのことではない〔＝ご廃疾としか考えられない〕と思って、（あなた様〔＝白河院〕に）申し上げたのです」と申し上げたので、（白河）院から内裏（の堀河院のところ）へその次第を申し上げなさった。（堀河院からの）ご返事では、「（たしかに）そのようなことがございました。（そのときは）普通のときではなかった〔＝特別なときだった〕のです。笛の秘曲を伝え（られ）て、（稽古として）その曲を千回（繰り返し）吹い（てい）たとき、為隆が参って用件を奏上したのです。（千回まで）もう二三遍になっていたので、（残りを）吹き終わって（から用件への返答を）言おうと思っているうちに、（吹き終わってから為隆の様子を）尋ねてみると、（彼はもう）退出してしまっていたのです。それを（為隆が）そのように〔＝私が気の病になったと〕申し上げたことは、（我ながら）とても恥ずかしいことです」と申し上げなさったということだ。

解答

(一) ア＝一通り丁寧にお聞きになることさえ滅多にないことなのに
ウ＝お気に掛けてお見定めになっていたのであろうか

(二) 上申書の内容の一々についてまでのお達しがあったということは

(三) 公卿たちに、過度に厳しい処分を下した堀河院を不愉快に思う気持ち。

(四) オ＝堀河院が気の病に取り憑かれたこと。
カ＝為隆が奏上に来た際、笛の稽古にかまけて返事をしなかったこと。

(五) 為隆の様子を尋ねてみると、彼はもう退出してしまっていたのです

【問題】（自習）

出典…小浜逸郎『先生の現象学』／オリジナル問題

文章略解

現在の学校においては、「教育」論を成り立たせている前提としての〈教師〉―〈生徒〉の安定した秩序が崩れ、旧来の教育論が通用しなくなってきている。そうした状況下で、短期的な教育論としての個別的な技術論と教師の姿勢論とが多く語られているが、より本質的には、学校という制度そのものを改革していく必要があろう。私の考えでは、それは私的な欲望の多様性を認め、公教育が人間を拘束する範囲を縮小するシステムの構築である。

解答

(一) 現在の学校では教師と生徒との関係における安定した秩序が失われ、制度的な機能不全の状態が生じているから。

(二) 制度としての学校とその内実とが乖離した状態。

(三) 学校での生徒はみな一様に教師の指示どおりに管理されるという前提が共有された状況下での、集団主義的な学校制度。

(四) 教師―生徒の固定的な秩序が崩れてしまった現在の教育危機においては、旧来の学校の枠組みに依拠した改革論は通用しない。そこでその打開策として、個人主義的な私的な欲望の多様化を前提としつつ、公教育の範囲を縮小するシステムを構築していくべきである。〔120字〕

(五) a＝需要　b＝厳密　c＝滋養　d＝活路

解説

㈠　傍線部分にある「このこと」とは、直接には前段落の「『教育』論」を指している。それは筆者によって「現実の動きから一歩退いたところで」（1行目）可能になるものだと説明されている。この部分が「このこと」の指示内容である。この段落後半で述べられる「（教育を）施されることをおとなしく待ち受けている子どもの像というものを思い浮かべること」（5～6行目）は、その「このこと」のための前提条件であって、「このこと」それ自体ではない。これをとらえちがえないことだ。

この把握ができれば、その「このこと」が困難な理由の説明は比較的簡単だろう。前述の「施されることを……思い浮かべること」は、「もっと具体的に言うなら」（4行目）という文言に導かれていることでもわかるように、その前の表現を具体的に言い換えたものである。したがって、「学校制度が一応きちんとしており、その中での実際の活動が、当事者たちの間で……営まれていること」（3～4行目）の部分も、この「このこと」の性質の説明になっている。このように丹念に文脈を追ってくると、解答の核とすべき内容も見えてこよう。要するに、①「学校制度がきちんとしている」状態が崩れたということ、②「学校の中での実際の活動」がうまくいかないということ、の二点が指摘できていればいい。《**解答**》では②を「教師と生徒との関係における安定した秩序」と表現してみた（この②の内容が、傍線部分に続く記述でより具体的に述べられているわけだ）。

㈡　指示内容は傍線部分の直前の「学校の制度がたてまえとしては残りつつも……かけ離れてしまっているような現状」であることは明らかだろう。解答にあたっての作業は、この部分（約1行半・69字）を解答欄（1行・20～25字）に要約することがメインとなる。こうした際には、抽象語・漢語による置き換えを考えよう。《**解答**》では「制度と内実との乖離」というふうに説明してみたが、この旨の指摘があれば基本的にOKだ。

㈢　傍線部分の表現は、1行前の「学校の旧来の枠組み」（41行目）と同義である。この表現は、前に述べられた二つの教育論（＝「教育の技術論」と「教師の姿勢論」（27～28行目）に対する批判として述べられている。したがって、解答にあたってはこの二つの教育論に共通する前提（として筆者＝小浜が挙げているもの）を抽出していく方向で考えていけばいい。

前者の「教育の技術論」に関して言及している部分で筆者は「学校の制度がたてまえとしては残りつつも……現状」を指摘している（これに関しては前問で見たとおり）。また、後者の「教師の姿勢論」に関しては「教師と生徒の関係」（34行目）での「集団統制

の技術」などが挙げられている。このあたりに通底する性質を考えていくと、①「学校の（制度的な）たてまえ」の残存状況と、②「集団主義」的な状況認識、の二点が見えてくるだろう。これらが押さえられた解答ならば基本的にＯＫ。《**解答**》では、㈠で解明した内容をもとに①を具体化し、②については「生徒はみな一様に……集団主義的」として押さえてある。なお、この②のポイントに関しては、次の㈣に関わる部分で「個人主義的な私的な欲望の多様な拡散傾向」（47～48行目）が述べられていることとの対比によっても導くことができるだろう。

㈣　傍線部分の内容に関しては、次段落冒頭の「これについての私の考えは、こうである」（47行目）以下で明言されている。したがって、この設問の作業課題も㈡同様、この段落の内容の要約がメインになる。

要約にあたってのポイントはまず、前の㈢との対比で、「個人主義」性をきちんと押さえることだ。これに加えて、傍線部分に「システマチック」とあることを鑑み、「多様で重層的な教育システム」（52行目）として述べられているところの「公教育が人間生活を拘束する範囲を、可能な限り縮小し……」のエッセンスも織り込みたい。要約としては以上二点が明確にされていればＯＫである。

あとは、字数制限（一〇〇～一二〇字）と、「論旨をふまえて」という設問の指示にあわせて、解答の文章を肉付けしていくことを考えればよい。ここでは、前提となるべき「個人主義的な私的な欲望の多様な拡散傾向」（47～48行目）に対して、㈢で答えたところの「旧来の学校の枠組み」に則った形での改革論が既に効果を失っているという旨の指摘などがあれば、前述の要約に無理なくつなげることができよう。

【問題】（自習）

出典…『撰集抄』巻七第十「吉野奥遁世者事」／オリジナル問題

現代語訳

ある年の陰暦三月のこと、（私の暮らす）庵の前に山桜の花が咲き乱れて、実に趣深く眺めつづけておりますと、年の頃が五十を越えている僧で、本当にいかにもみすぼらしい（人）が、片方の袂に米を包んでいたのだが、（その僧が）この花の下に立ち寄って、そこで休むように座り込んでいた。（それを見た私は、はじめのうちは、）「何とまあ恥知らずなことだ、仏道に帰依する気持ちなどもありませんのに、生きてゆくのが苦しくて、他人の（家の）門の前に佇み、袖をひろげ（て物乞いをす）ることをしているのでしょうよ」と思って、（我知らずその物乞いに聞かせるようなつもりにでもなったか）なんとなく声高に念仏を唱えておりましたが、その僧が立ち上がって帰ろうとするのを（見ているうちに）、「仏や菩薩は、この世に生きているもののすべてを慈悲の心で御覧になるのだから、（仏道に帰依する私としては）あのような者でも、（なんの施しもせずに）見過ごしてよいはずがない。まして（仏道の立場から言えば）だれでも自分たちと）同じように仏となるべき本来の性質を備える人である（はずだ）。少しでも（この人を）のけ者にする気持ちは持ちますまい」とことさらに思い直して、「しばらく、花をお楽しみください」と声を掛けたところ、その人は、「うれしくもおっしゃってくださいました〔＝そのようにお誘いくださるとはうれしいことです〕。

咲かぬまも……山桜が咲かないうちもこうして（桜の木を眺めて日々を）過ごしていましたけれども、そんなに花の蔭でばかり風流に暮らしていられるものでもありません（から、花が咲くとやはりうれしいものです）

と思われます」とさらりと口にした（態度に）心ひかれたので、普通の人ではいらっしゃらなかったのだなあと思って、

咲かぬまは……花の咲かないうちは（花の咲くのばかりを）ひたすらに待っている旅人が、咲いたのをどうして眺め（にやって来）ないことがありましょうか（、どうぞ花が好きな私と同じ気持ちで存分にお楽しみください）

と返歌を詠みましたところ、その人は、（私も花が好きなのを感じ取ったのか）好意を寄せたように思われて、「私もこの山の奥で俗世を離れて（暮らして）おります者です。（私と一緒に）いらっしゃって（私の）住まいをも御覧ください」と（いう言葉が）あったので、そのまま誘い連れ立って、（彼の住まいを）見に出かけたところ、（着いてみると）桜が四、五本茂っている下に、松でもって（屋根の）

上を葺き、まわりにも（簡単な垣根を）立てまわして、（持ち物といえば）着ている（夏用の）ひとえもののほかには、すこしも物がありません。人里を遥かに（離れて、俗世を捨てて）仏道に専心している庵なのだろうと思えて、ますます理想的な住まいでございます。

そんなこんなで「どのようにして来世への迷いを晴らしたらよいのでしょうか」と尋ねましたところ、「前世・現世・後世のどの世においても、存在には実体などないのだと悟ることだと思っております」と答えなさいました。（はじめは）ただ放っておけばよい物乞いと思っておりましたが、（お話をうかがってみると実は）このような仏道への帰依の心深い方でいらしたことだなあと、奇特で尊いことに思われて、「（お互いに）この（吉野の）峰に暮らしているような間は（お付き合いを願いたいものです）」と約束して帰りました。（その人は）他とは違うほどの、真の仏道に専念する人だと思われました。山深く暮らして、三世不可得の悟りを開いていらっしゃったような心のうちは、引き合いに出すものがないほど（尊いこと）でございます。

解答

(一) ア＝五十歳を越えている僧で、本当にいかにもみすぼらしい人
ウ＝少しでもこの人を疎外する気持ちは持たないことにしましょう
エ＝山桜が咲かないうちもこうして桜の木を眺めて暮らしていたけれども

(二) 仏道に帰依するのでなく生活のために出家を装っているように見える人物を不快に感じ、庵の前から立ち去らせたかったから。

(三) 桜の木陰で風情ある住まいであるだけでなく、質素な暮らしぶりから仏道に専心する住み手の心構えを感じたから。

(四) 近くで暮らす間は知り合った出家僧と交際したいということ。

解説

(一) **ア**について。傍線部中の格助詞「の」が同格の用法で用いられていることに注意。答案末尾に適切な体言を補う。「たく」は漢字を当てれば「長く・闌く」で、「盛んになる」意から「盛りを過ぎる」という意味でも用いられる。「～げなり」はさまざまな語について形容動詞を作る接尾語で、もととなる語に「いかにも～な様子である」といったニュアンスを付け加える。

ウについて。係助詞「も」は否定・仮定の構文中で用いられると、現代語の「でも」のように最小限の強調のニュアンスを示すことが多い（ただしこの文の場合は、訳文で「少しも」の文節を「持たない」の直前に置けば「でも」と訳さなくとも意味は通じる）。「そばむ」は「側む」で「横を向く・横に外れる・そむける・ひがむ」の意味。現代語でも「目を側める」などと、「そむける」の意味で使われる。ここでは他者を対象とする表現であるから、「疎外する」の意味で取るとよい。「侍らじ」は、「じ」を《打消推量》で訳すと他者の気持ちを言うことになるので、《打消意志》で訳出する。

エについて。東大で和歌の解釈が問われる場合、上の句もしくは下の句のみを訳させるような部分的な設問が多いが、文中における和歌の位置付けを考えれば、直接に設問部となっていない部分、さらには歌の前後の地の文の表現との関連も答案に反映されていなければならない。ここでは、「こそ～已然形」の係り結びに、単なる強意の係り結びのほかに、《逆接強調》の働きもあることと、「さて」が指示副詞であることに注意。一般に散文では出題者側で句読点を補ってくれるので「こそ～已然形」の用法の識別は容易だが、和歌の場合は意味の上から読者が判断しなければならない。また「さて」は現代語では接続詞としてもっぱら話題の転換を示すが、古文ではむしろ「このようにして・そのままで」といった意味で用いられることが多い。ここでは「咲かぬ間も」から、「（花の咲いていないときも）いまこうしているようにして（過ごしてきた）」の意味で「さて」と言っていることがわかる。したがってこの「さて」は、「桜を眺めながら」の意味である。さらに、この歌が筆者の「花を眺めて行かれよ」という呼び掛けに対して「うれしくも」と感謝の意を込めて詠まれたものであることを考慮するなら、「花が咲いているのを見るのはうれしいものだ」というのが一首全体の趣旨であることになる。したがってこの「こそ～已然形」の係り結びは《逆接強調》の意味にとるのが妥当である。

(二) 「なにとなく」は現代語の「なんとなく」で直接の根拠を自覚していないかのような書きぶりであるが、前後の表現を吟味すると、この段階で筆者が「僧」に不快感を催していることは確実である。3行目の「あらむざんや」の「無惨」は（「惨たらしいさまに対する同情」の用法もあるが）、本来的には仏教語「無慚」に由来し、「罪を犯して反省のないこと」を言った。ここでも続く「道心な

ども侍らねど、……袖をひろぐるわざをし侍るにこそ」の表現から、この「僧」は生活のために形だけ、人に施しを受けることのできる出家者のふりをしているのだと筆者が判断していることがわかる。また、傍線部の後の4～6行目では「仏菩薩は……すこしもそばむる心侍らじと思ひなして」と言っており、「思ひなす」は意識的にそう考えようとすることだから、これを逆に考えるといったんは疎外したい気持ちを感じたことが読み取れる。「出家の格好はしているが真の意味での出家者ではない」と見える者に念仏を聞かせるのは、発心を促す親切心からということも考えられるが、このように相手に対して不快感を持っているのが明らかな場合は、あてつけ以外の何ものでもない。あとは、その筆者の行為に続いて「僧」が帰ろうとしたことを記述しているので、これを直接の目的として答案に盛り込めばよい。

(三) 傍線部中の「いとゞ」の表現に注意。「いとど」とは「いっそう・ますます」の意味で、続く表現について以前からあったものが程度を増すことをいう語である。直前に「～と見えて」とあるから、「いとゞうらやまし」くなったのは13行目の「人里はるかにて、おもひすませる庵ならん」と思ったからである。これを答案の後部に置くことにして、「いとゞ」の表現のもとになる「そのまえからうらやましかったこと」を問題文中に求める。

「人里はるかにて、おもひすませる庵ならん」とは、「僧」の生活の質素さに対する印象であろうと考えられる。この質素さの表現となる部分が12行目の「松をもちて上をふき」からである（屋敷の建材としては檜や杉などが好まれ、ヤニの多い松材は下級品とされる）ことを考慮すると、「僧」のすまいを見ての感想としては「桜の四五本しげるもとに」が残る。ここで桜に関して文章冒頭を思い出すと、筆者の庵の前にも桜があり、これが咲き乱れているのを「よにおもしろくながめわたりて侍る」（1行目）とあることから、筆者自身も桜に心を寄せていることがわかる。したがって、「ますます」うらやましいのは、もともと「僧」が桜の木陰で暮らしていることがわかったからだと考え、これを答案の前半部とする。

なお、『撰集抄』の筆者に擬される西行法師の桜好みは有名で、辞世の歌も「願はくは花のもとにて春死なむその如月の望月のころ」（『山家集』〈上春〉）であり、西行はそのとおりに世を去ったと伝えられるほどである（陰暦二月十五日は釈尊入滅の日とされている。出家者であって桜が好きならもうこの日に死ぬしかない）。

(四) 傍線部分は文として完結した表現となっていないので、省略された部分を推定することと、あわせて実際に表現された部分の意図

を説明しなおすことが要求されていると考えられる。

傍線部分に婉曲・仮定の助動詞「む」が見えることから、省略部は《推量・意志・願望》といった内容であることが推定される。さらにここは続く「契りて」の具体的内容であることも読み取れるので、省略部は《意志・願望》であろうと絞り込むことができる。したがって省略部については、「この山に暮らすような間は」どうしたいというのか考えればよい。傍線部の前で、筆者は「僧」の出家者らしい暮らしぶりや問答から彼に対する第一印象をすっかり改め、「ありがたくおぼえ」るほどに好感を抱いている。とすれば「今後とも交際したい」と願うのが自然だろう。また「このみね」とは、11行目の「僧」の言葉「我も此山の奥に世をのがれ侍る物也」から、筆者と「僧」の両方が暮らしている山のことである。これらを総合すると、「近くに暮らしている間は交際を続けよう」と思ったものと考えるのがよいことになる。